

し、また RA の活動性、滑膜組織における表層細胞の増殖、リンパ球浸潤と血管増生との相互関係について検討した。さらに血管内皮細胞において、トロンボモジュリン(TM)、HLA-DR 抗原の陽性率について検討したところ、RA 群において血管内皮細胞の TM 陰性率、HLA-DR 抗原陽性率が高い傾向にあった。今後 RA 滑膜における TM の機能の面から、さらに症例を重ね検討することが必要と思われる。

#### 4. 卵巣ムチン性嚢胞腺腫に肉腫様病変を認めた 1 例

(産婦人科)

横尾 郁子・滝沢 憲・佐藤美枝子・井口登美子・武田 佳彦

(第 2 外科)

亀岡 信吾・木村 恒人・浜野 恭一  
(病院病理) 相羽 元彦・平山 章

症例は、右卵巣嚢腫の診断にて 2 回の手術を施行された 52 歳主婦。2 回の摘出物は良性ムチン性嚢胞腺腫であったが、手術直後に再腫大し放射療法、アドリアマイシン動注療法により一時緩解を得た。約 10 カ月後、腫瘍は急激に腫大し膀胱・直腸壁にも浸潤したため骨盤内臓器全摘術を施行して、大部分の腫瘍を摘出した。

H-E 染色では紡錘形の細胞増殖がみられ、KL-1、EMA 染色も陽性なので肉腫が考えられた。Desmine、Myoglobin 染色が両方共陰性であったが、Masson 染色で腫瘍は赤染し、PAS 染色で弱陽性であったので筋肉由来の肉腫が考え易かった。血管壁・直腸壁・膀胱壁への浸潤癒着を認めた手術所見からも平滑筋肉腫の可能性が示唆された。しかし、もし平滑筋肉腫とした場合、それがいつ発症したのか、先行した卵巣腫瘍との関連性はどうか、さらに局所的に強い浸潤傾向を示したにもかかわらず遠隔転移を認めないなど特異な問題があり興味深い。

#### 5. 特異な絨毛炎の所見を示した胎内麻疹感染の胎盤の 1 例

(第二病院中央検査部) 藤林真理子

(国立予防衛生研究所病理部) 佐多徹太郎

(聖ルカ国際病院病理科) 斎木 茂樹

妊娠 22 週に麻疹に罹患し、24 週 5 日早産となった妊婦の胎盤を検索した。

絨毛間腔に多量のフィブリン沈着があり、絨毛の syncytial trophoblast は壊死に陥ったり、核の空胞変性やスリガラス様変性を示した。Syncytial trophoblast に接する絨毛間腔にリンパ球や単球が浸潤し、

syncytial trophoblast の直下の絨毛間質には組織球浸潤があった。しかし、麻疹・サイトメガロウイルス症・梅毒・原因不明の絨毛炎 (VUE) などと異り、絨毛間質深部には胎児由来の炎症反応はほとんど認めなかった。

麻疹ウイルスの nucleocapsid に対する抗体を用い、ABC 法を施行したところ、syncytial trophoblast に麻疹ウイルス抗原の局在を見た。卵膜炎を合併していたが、卵膜では陰性であった。

麻疹の血行性胎内感染を示す胎盤の所見を報告した例は他にはなく、貴重な症例なので供覧した。

#### 6. 中毒性表皮壊死症 (Toxic epidermal necrolysis: TEN) の免疫病理学的検討

(皮膚科)

豊田 裕之・池田美智子・肥田野 信

最近、中毒性表皮壊死症 (Toxic epidermal necrolysis: TEN) の発症機序として GVH 反応が考えられてきている。TEN の皮疹に浸潤している細胞を凍結組織片を用いてモノクローナル抗体で染色し、GVHD と組織学的、免疫病理学的そして臨床的に比較検討した。

結果は、真皮では Leu2a と Leu3a 陽性細胞は同程度だったが表皮では Leu2a 陽性細胞が優位に浸潤していた。Leu6, Leu7, Leu12, LeuM3 陽性細胞はほとんど認めなかった。HLA-DR 抗原陽性の表皮細胞が一部に認められた。

組織学的には表皮の好酸性壊死、液状変性、リンパ球の表皮内浸潤と両疾患とも同じ組織像を示し、浸潤リンパ球のサブセットも GVHD と同様の傾向を示し、臨床的にも比較的類似していた。

以上より、TEN の発症機序として GVH 様反応が示唆された。

#### 7. 結節内出血を呈し、肝切除により救命し得た非硬変肝の多発性結節性過形成病変の 1 例

(消化器病センター)

山本 雅一・高崎 健・中野 雅行・

鈴木 博孝・小林誠一郎

症例は 27 歳、男性。主訴は右季肋部痛。6 年前に交通事故にて肝外傷の既往あり。来院時超音波検査にて肝右葉内に不均一な高エコーを呈する腫瘤像を認め、血管造影、CT 検査にて肝右葉腫瘤内出血と診断し、手術を施行した。

開腹所見では肝は非硬変で両葉に多発性の柔らかい腫瘤があり、右後区域被膜下に血腫を認めた。左葉に